

挨拶で見える三重の人間関係

全国山村振興連盟事務局長 實重重実

新型コロナウイルスが全国的に蔓延する中で、ソーシャル・ディスタンスが強く意識されるようになってきました。また、発声するだけで飛沫が飛び散るので、電車の中などでは極力会話しないようにとアナウンスされています。こうした中であって挨拶など、コミュニケーションの仕方も変化していくのではないかと思います。

私の住んでいる東京のマンションでは、住民同士が敷地内や建物内で出会っても挨拶をしません。私も入居当初は誰と出会っても挨拶の声掛けをしていたのですが、そんなことをしているのは自分だけなので、やがて鬱陶しがられているのではないかと悟りました。中にはわざわざ顔を背けるようにしてまで、相手と目を合わせないようにしている人もいます。

そこで私はこう考えました。都会の人間は、人口密度が高すぎてストレスを感じています。このため、せめて自分のマンションではストレスを感じないように、部屋を一步外に出たら人と出会ってもそこは街角と同じで、部屋の外にいるのは赤の他人だと捉えるのではないのでしょうか。

かつて山村の集落を視察で訪れたとき、スーツ姿の男たちがぞろぞろと歩いているのに、出会う人たちが誰彼となく明るく挨拶をされるのが印象的でした。都会と対照的です。山村ではむしろ人口密度が低いので、挨拶というコミュニケーションをすることによって、治安や災害防止といった安心・安全につなげているという面もあるのかもしれませんが。

ずっと昔、冬に仕事でフィンランドのヘルシンキを訪れたときのことが思い出されます。私が街角で地図を広げていると、必ず誰か土地の人が近寄って英語で話しかけてきて、道を教えてくれました。これもフィンランドのように広大な地域では道に迷うだけで危険だから、そのような社会習慣があるのかもしれませんが。まして冬となれば、凍えてしまうからなおさらです。車載電話が北欧から発達したのも、こうした自然との関わりがあったからに違いありません。

都市の挨拶と山村の挨拶。こうした二重の関係に思いを巡らせていたところ、「緑のふるさと協力隊」で沖縄に行っていた女性から、「私の行っている地域では、挨拶はしません」という話を聞きました。その地域では地域ぐるみが家族のようなものであって、個人と個人の間の距離がとても短く、お互いに「〇〇兄（あに）」「〇〇姉（ねえ）」というような呼び方をするらしいのです。挨拶をしないで、いきなりため口から始めるぐらいに人間関係が濃密なのでしょう。確かに家の中では家族同士が出会っても「こんにちは」とは言いません。「お前、なんで今日はめかしこんでいるんだ」といったような会話から始めるのが、その地域の濃密な人間関係なのかもしれません。

挨拶もしない都市住民、挨拶する山村住民、更に、挨拶しない沖縄のある地域の住民という三重の人間関係が浮き彫りになってきました。コロナ禍によって、このような関係性は、どのようになっていくのでしょうかね。